

## 分離派建築会の「芸術」——領域の確保と霧消

25 May 2019 天内大樹

分離派の成立：①教育の中で「建築」概念にビルトインされた対立図式②「構造派」の言論／③同時代の思潮

5 分離派の終焉：①構造力学→規則の偏重②日常と芸術の関係③階級と芸術の関係

### I. 分離派建築会の成立

#### A. 教育——「建築」と「芸術」

##### 1. 工学部の中の「造家」

10 工学校→工部大学校＝「専門学校」：「外国教師を雇い，専門諸学校を開くものは，専ら彼の長技を取るにあり，その取るべき学芸技術は […] 工学等なり，その他神教修身等の学科は，今之を取らず」（天野郁夫『大学の誕生』）

1879.11第1期卒業＝工学会設立→1886造家学会

1885文部省移管，86帝国大学令＝東京大学工芸学部と合併，帝国大学工科大学

##### 2. コンドル——"Architecture = Art + Science"

15 Josiah Conder, 1852-1920：1877.1来日，-84工部大学校教授82記述，84-5『工学叢誌』発表，松田周次・曾根達蔵訳「造家必携」第二編序文：

造家学は學術 {サイアンス} にもまた技芸 {アート} にも属するの学なり（『工学叢誌』1885.7，391-2）

講義録『建築学概説』1878.3

20 「諸君は総ての科学的研究の法則や結果を習得せねばならぬことは勿論 […] しかし，諸君は建築家の教育が科学教育であると同時に芸術でもあることを肝に銘じておく必要がある」（『建築史学』n.4，1985.3，116）

##### 3. 西洋的概念の再導入——伊東忠太

造家学会：1887-『建築雑誌』

25 伊東忠太「「アーキテクチュラル」の本義を論じてその訳字を撰定し我が造家学会の改名を望む」『建築雑誌』1894.6→1897学会1898学科名

建築哲学（沿革を論じ形式の由って来たるところを考えその形式の美醜を論じて手法の運用の原則を研究する）と建築術の対比

「建築進化の原則より見たる我邦建築の前途」『建築雑誌』1909.1

30 畢竟此の圏内に轉々して妄執の念を脱離することができないのであります，それでどうかして此の輪廻から出離したいという念は欧羅巴国民の中に十分に充実しております，それで或る方面に向かって一つの新乾坤を開こうと試みているものは即ち仏国のアール，ヌヴォーや独逸のセセッションなどというものでありまして，兎に角その勇氣は敬服すべきものと思ひます」「新生面を開くことに煩悶しているのであります

#### B. 言論——構造派の登場

##### 1. 辰野金吾——意匠班と構造班

辰野：1914建築学会講演会

40 建築学科中に美術と併行両立しがたい科目がある。即ち構造学である，なかんづくその構造学中の数学がそれである […] 建築家にして美術と数学の両方が満足にできうということははなはだ難しい（『建築雑誌』331，3）

構造的教育と美術的教育とを全然区分し努めて学生の長所を利用して，美術に長じたる者はこれを美術的の方に進め，数学に長じたる者はこれを構造的の方に向けてるように指導するのを最も適当と信ずる […] 二個の学校を互いに独立させてその学生を別々に教育せよというのではない，一つの学校においてA級B級というように区別して教育すれば今述べたるとき建築家を養成することができる（6）

##### 2. 佐野利器——ナショナルリズムと工学

1900入学→「芸術」を指向し「科学的理論」を欠いた講義に「失望」←「形の善し悪しとか色彩のことなどは婦女子のすることで、男子の口にすべきことではない」（『佐野博士追想録』1957, p.6）

5 辰野先生は「…」日本には欧米と異なる困ったことがある。地震がこれである。明治24年の濃尾大地震では煉瓦造の建物が、がらがらやられた。そして自分は「…」何ら理論は判らない。耐震構造の研究はこれから諸君のなすべき仕事の一つであると説かれた。そこで自分は建築にも自分のなすべき仕事があるのを翻然と悟った。これから耐震構造で、国家社会に尽くそうと決心をした。（同）

1911留学の途上：

10 上海、香港、シンガポールと寄港するごとに、英国人に東洋が支配され、すべての事業が白人の手に取られているのを見て感慨に堪えず日本もうっかりしていると同様なことになる。憤激した。建築学などと呑気なことをやってるときではない。いっそこらで上陸して一旗揚げようかと本気になって考えた（同14）

1911「建築家の覚悟」（『建築雑誌』）

15 西洋のアーキテクトはいかなることを研究しいかなることに力を注ごうとも日本の建築家はその訳語であるがゆえからいかに歩調を合わせねばならぬ理由はないのである。日本の今日の建築家の意義は日本の今日の事情によって定まらねばならぬ(3)

20 我国の富力が残念ながら到底未だ列強の脚下にも及ばざることは誰しも承知のことであろう。現在の富力の差は殖産興業を間に挟んでやがてまた将来の富力の差を生ぜぬであろうか「…」列強の平和は武装で維持せられ、列強の軍備は絶えず拡張せられつつあるということを知ると竦然たらざるを得ない（4）

25 余と雖も美術の価値は承知しておる、しかし美術に対する余の解釈は「…」「現在は只、国民の慰安、人格修養、実利増進の手段等要するに国力発展上に意義を有するに過ぎぬ」「…」美的意匠は単純なれ、上品なれ、堅実なれ、決して華麗に流るることを許すべきでない、要は実利の問題が主である（5）

cf. Gregory Clancey, *Earthquake Nation: The Cultural Politics of Japanese Seismicity, 1868-1930*. Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press, 2006

### 3. 野田俊彦——初学者の悩み

30 1915野田俊彦卒業論文『鉄筋混凝土と建築様式』→前半を切り取り改題→「建築非芸術論」（『建築雑誌』7月）

↔黒田鵬心「真善美」を意図か

35 実際三者の一致を理想として之をもって建築評価の標準として居しているであろうか。さらず、一方がズ抜けて善いならば他の二方面は多少悪くとも「…」彼らはそれを好建築として許すであろう。（31）

35 建築がその実用的目的を満足して遺憾なき事はしめて美なる以上は〔 〕実用品として完全なる建築に同時に美も必要であるかないかという問題は意味をなさない

↔トルストイ『芸術とは何か』コミュニケーションの道具、社会性を涵養

+芸術から機能を完全に取り去るべき（←『判断力批判』？）

40 空間を仕切って作者の感じを発表しようとする芸術が成り立たない事はない。「…」しかしそのものは建築ではない。建築と名付けても支障はないけれどもその内に人が起居し会集するものではあり得ない。芸術品ならばその内に人を住ましむることを止めて作者に与える不便を去ったらよさそうなものである。

## C. 思想——生命と人格

### 1. 後藤慶二——自己の人格

45 後藤慶二：「自然の要求と我々個人の要求との間」, 「たとえば構造または実用と「…」美観との間に」矛盾が起きまいか（浪和会「建築」n.200, 1916.7）

50 我々が建築を作ろうという場合、そこには無数の法則が存在する「…」それらの無数の法則は「…」しばしば互いに相矛盾撞着する「…」その解決の一つは妥協です、すべての法則の主張を貫徹せずに互いに譲歩し合っておくのです、「…」第二の解決は、唯一つの法則を残して他はみな捨ててしまうことです、これは妥協を脱していかにも徹底的に見えます、しかしそれは「…」単に問題を回避したに止まります

法則を外部的にとって他から律せられようとする間は撞着から到底脱することはできません、多くの法則を捨てて只一つの法則に即くともそれは同じことで [...] これを超脱しようとならば自己のうちに法則を見出さなければなりません、あらゆる外面の対象を咀嚼して新たに自己の内面にオートノミックの法則を樹立しなければならないのです

5 痛切に私は自己の充実の必要を感じます、自己を拡張しなければならないと思います  
 [...] 我々は自己の統一を捨てないかぎり自己の法則に反して躍進することはできません、しかしてこの法則は自己心性の全体の作用から起こるものですから、自己が充実されなければその法則は確定することができないのです

後藤慶二

10 [...]野田] 学士がああ論旨を忠実に実行していけるかどうか [...] 恐らく折に触れて内に沸いてくる芸術欲を建築に寄託したくなる時が起こってはこないであろうか（「ミスキアトー 建築非芸術論」浪和会『建築』196, 1916.4）

野田俊彦, 小倉強宛書簡, 1915.7.2付, 『建築画報』1930.4

15 自分のDiplomaが甚不徹底なものだったことを後悔しています。建築に美の不必要を論ずる自分が果たしてああdesignにおいて建物を美しくしようとする企てをしなかったか。甚だ後ろめたからざるを得ない

## 2. 堀口捨己——生命

堀口捨己：建築＝「最も大きな最も多面的な最も人生に密接な芸術」

20 [...] 芸術とは私は表現であると思います。表現には芸術的本能の欲求が基とならなければなりません [...] 本能的な欲求によってこそ作家自身が意識しようとしないうちに係わらず個性が現れ全人格が現れるのだと思います（「建築に対する私の感想と態度」『作品集』1920, 4）

「本能」→「インスピレーション」「生命」

25 「新旧を問わず」私自身の表したいものが表れるならばそれが何であると顧みる暇がありません [...] ある刹那のインスピレーションによってのみ正か不正かが解りましょう。 [...] インスピレーションは自分から作ることができません。 [...] しかし求めずにはいられないものです。生命は常にそれによって新しく洗われ救われんことを求めて止みません。 [...] それ 生命が常に清められることによって、欲求は清く新しくしかも真実であります。（同, 12）

30 「大正生命主義」（鈴木貞美）／〈人格主義〉（永井隆則）

## 3. 森田慶一——構造と表現の統合

「構造派」＝ペーター・ペーレンス

35 元来芸術品は芸術家の人格の現れであって、芸術品の内容は [...] 芸術家が意識しているといないと関わらずその形式のうちに表現されているものの全てでなければならぬ [...] 恐れよう、意識して表現しようとした内容よりも無意識に作品に現れる自分たちの人格を。（『作品集』1920, 34）

「生命の表現」「個性の閃き」＝海底の「小さい下等動物の殻」の「有機的機能」「必然的形態」、水力ハンマーにみる「巨人の緊張」と「虚飾」なき「必然さ」「偉大な力の美しさ」

40 [...] いわゆる美的建築の世界にこんなにしっかりした根底 [= 構造学] のある建築が現れたとき、既成のスタイルだけが建築だと心得ている建築家か、見て見ぬふりをする卑怯者でない限り、動揺して深い懐疑に陥らざるをえない。この懐疑からはやがて建築非芸術論さえ生れる。

45 「構造派は決して建築非芸術を標榜しているのではない。こんなことはその作品を見れば一遍にわかる事である」

「自分らの表現欲は構造派を生む、構造学はこれに格好の方法を供給する」

## II. 分離派建築会の終焉

### A. 工学——森田慶一

#### 1. 工人的傾向：統合的視点

1921『作品集』：「工人的表現」＝「建築を構立てられたものとして意識し、この構立てられた建築の中に自己を表現しようとする」傾向、「構造の純一さそのものが直接に要求されるのではなし」←「構立てが多様であって表現があまり局限されない」中から選択すること、「構造を選択する自由」

5 1924「構造について」：「建築という特別な芸術の領域を区画する」ため「構造」，「純粹に知識的な，構造力学の取り扱う解析的な力」ではないので「構立て」

## 2. 機械との出会い

10 コルビュジエ『建築に向かって』1923→27「建築と機械と」『新建築』1927.2  
建築も機械も「それを静かにながめる余裕」が生じた＝「美しき機械が生まれ」る  
→「安全と能率」のみ要求される。「構造主義者は[...] 美しき建物を作るのに力学の理論を利用」できない。「力学の生命に服することによってできる建物のみがそれ自身で自然に[...] 美しい」という「信仰」にすぎない。

15 「構造主義的過程を経た作品」の「作家」は「意識的な構造主義者ではない」／  
「構造主義の仮面をかぶった芸術的建築家の作品はほとんど失敗であった」／ベー  
レンスら「構造主義作家と呼ばれる優秀な建築家の作品」は「あまりに芸術的」  
なるほど建築は力学の原理に指導されてはいる，しかし美しき魂の力を除いてそこに何  
が残されるでしょうか。ベーレンスの工場に見る芸術性はいかにして力学と関係せしめ  
ることができでしょうか。単なる機械の美しさではありません。実に芸術的と呼べるべ  
20 き経験の意識であります。

## 3. 模倣と調和

1928「いみたちを・こるぶしえり」その他」（『建築新潮』1928.11）

「雨をしのぐ開け放ちの場所（l'abri ouvert）」→「ル・コルビュジエを模倣る」  
25 ⇔「アブリのこの効用性を[...] 記していない」「風雨をしのぐ目的に対して彼の  
アブリ[...] が唯一最上の解決ではな」い←「現代都会性」「機械の精神」，ただ  
し「建築は[...] 何か実用的なもののあなたに存在する」と併存  
古代ギリシア人の「汎美主義的頭脳」

[建築の美しきもの]は建築が世界秩序に与ることによって当然将来される[...] 万物  
に普遍にして，建築に特異なものではなかった。理論付けの要がなかった

30 コルビュジエ「造形意志の放[埒]を戒め，世界秩序への参加を要求」すべく「規  
準図形を利用せよ」（トラセ・レギュラートル）

## B. 日常生活——今和次郎

### 1. バラック装飾社

35 今和次郎：「バラックを美しくする仕事の一切[...] 建物内外の装飾」（「バラ  
ックを美しくする仕事」『建築世界』1924.1）

「因習から離れた美しい建物のために街頭に働くこと」＝「芸術の試験」

①因習的な芸術観を貧富の階級対立の側面から否定（神原泰「山間の夏期テントの  
生活のように，愉快的健康的な楽天的」）

40 ②平凡な人々の簡素な生活に伴う素朴さ（「素朴なまま埋もれて無意識なまま美  
しい仕事に働いている」鍛冶屋，「労働を忠実にやり，工芸制作にたのしく働」くこ  
と，大坪重周「工芸作家は民衆である」）

③労働者の「合同」と街中の演劇性（遠藤新／子供達／ペンキ職人，飛鳥哲雄「作  
家自身が楽しみながら働くこと」／今「役者としての生活」）

### 2. 論争の3本の軸

45 ①芸術または建築と装飾との関係

今：「幾何学的形態に還元」した物質の構成⇔「人生」「世相」の「リズムカルな  
表現」，「生活の伴奏」，「感情飛躍の興奮からの偶然の結果」＝「建築を超

越」, 「普通建築家達の最も嫌うロココの装飾」「微細な音色」(「装飾芸術の解明」『建築新潮』1924.2)「個性」も芸術家ではなく描くべき対象に帰した  
瀧澤: 造形芸術において「音楽的なリズム」が建築の特徴(『作品集』1920) 器楽との類比, 材質・抽象的な形状に着目

5

②様式を選択をめぐる態度

今: 「野蛮人の装飾をダダイズムで」→共同作業の不統一は「めったにない味わい」→自己を投影した形態と東西両洋の因習的な装飾のみ禁じた

様式の統一は「生きている心の人たち」全般を束縛

瀧澤: 曲線美=「絵画的」「描写的」「メロディアス」「造形美術的なエフェクト」/直線美=「立体的」「象徴的」「リズムカル」「音楽的なエフェクト」

10

音楽の譜面と建築図面, 演奏される音楽と実現される建物を重ねる発想

③職工の自由の適否: 今……職分を超えた「装飾」↔瀧澤……職工の介在を排す

今: 芸術家の共同作業→様式の統一の放棄→交響楽の「ソロの美しさ」を強調=建築と装飾は作曲と部分演奏の関係に(「装飾の仕事をする人の心」『住宅』1924.9) =ライト批判(「復興都市の建築美」)

15

瀧澤: 楽譜の厳密な規定=建築家の指示(『作品集』1920) 作曲家と演奏家→オーケストラにおける指揮者と楽団員, 演奏上の責任は「一に指揮者にかかって」おりオーケストラは「「ソロ」の集合ではない(「建築美のために」). 今「気の弱い而して全ての人間の心に興味を感じることには重きを置きたい」←「八方美人的, もしくは博愛主義的心理」「建築家の芸術的良心と全然相容れ」ない

20

C. 階級の「疎外」——岡村蚊象

岡村蚊象(山口文象)↔インターナショナル建築会と糾合を図った石本, 「形而工房」の活動から瀧澤の認識では退会扱いにされた蔵田(「座談会 分離派・東京中央電信局/山田守」『建築記録/東京中央電信局』1969)

25

1. 創宇社建築会

山口蚊象: 蔵前高等工業学校附属職工徒弟学校木工大工分科卒業→清水組入社, 山田守「建築実態の研究に着目して建築観念を向上せしめよ」(『建築世界』1920.4)を読み通信省営繕課へ→分離派の会合に参加→創宇社結成

30

「高等官でない者でデザインにタッチできた」唯一(『建築家山口文象 人と作品』相模書房1982)

35

①美的な側面の偏重への批判:

瀧澤真弓「彫刻的タッチのために建築的なものが幾分被われていたかの憾み」(「第一回創宇社建築制作展覧会」『建築雑誌』450)

佐藤武夫「思想」が「不消化物」/岡村「丘上の記念塔」案

「全建築から形態のみを抽出してこれを美術的に取り扱うことの意義」を問う(『建築新潮』26.12)「近代的な工学的所産としてもっとも適わしげな外貌を備えて, しかももっともロマンティックな内容をもった撞着」→「工学が理論と計算の成果をもって構成していくあのいわゆる無意識的創作の態度」を採るべき

40

広木亀吉「形の美を先に追う」←「もっとも必然的な合理的構成にこそ真の美がある」

45

②構造力学的条件のクリア:

堀口捨己(「建築を想う(1)」『建築新潮』26.12)カンチレバーが「今の材料や, 架構の法では極限を超えている」「ただ建築的な手法を使用した芸術的構成」に疑念→岡村「建築の形の方面のみの研究をやる」

我等は古代人の純情なる創造の心を熱愛し, 模倣てふ不純なる風潮に泣き永遠の母への憧れをもて頽廃と陳腐とにただれたる現代建築界の覚醒を期す。  
×  
我等は生の交響楽——全宇宙に我等の生命, 美しき「マッス」を見出すべく専心努力する。

「建築なるものを分けて、形の方面とか、美の方面とか、実用方面とかを考えるとが […] 不満」

野口巖「自分の家」←堀口「自分の生活に適する家を考えて、そこに彫刻的中間体の遊戯で済ませないところ」「生活」からの「必然」

5 ③「構成」「コンポジション」への批判：

大内秀一郎「他の造形芸術の進化と同じ進化の範疇に属している」（「創宇社第四回建築制作展覧会私感」『建築世界』26.11）

10 蔵田周忠、「第3インターナショナル記念塔のための模型」（1919）を念頭に「建築的な形とか現れとかを、あらゆる造形から抽出して考え追求し、構成していく努力」は「実在の建築」と異なる「建築的なもの」、建築家が熱中すべきではない

## 2. 創宇社の「離陸」

「無選共同建築展」＝創宇社第5回展

←金須孝「創宇社主催無選共同建築展批判」『建築新潮』28.2

創宇社「同人諸君の建築における社会的認識」を問う

15 建築家は「一般民衆」の「一般的な生活」に差し向けられ、設計の向上には「階級意識」が求められる

岡村「プチブルジョア階級の家」←「試案としてもっと一般的な生活に適する」もの、例えば「一万人を入れるアパートメント」

20 「建築家自身が階級意識に目覚め、その生活の必要から生まれた作品のみ真にいいものである」

### 谷口吉郎

25 谷口吉郎「分離派批判」（『建築新潮』1928.12）「分離派と現実社会との関係」を検討：分離派は「建築硬化症の産物たる嬰退的な耽美主義の蠢動」「建築を自己の逃避所とし […] その小世界に自我を誇大に主張せんとする井蛙的な建築芸術至上主義の傀儡」、双鐘居は「起重機と電気機関車の運動にさえ目を蔽わんとする人道主義的な可憐さの囁き」に「社会的環境との間に越ええざる障壁を築いてしまった」「芸術の偉がりのなかに幽居し因習の享楽に耽る金銭の無計画な乱費」、

30 「無定見な追従と独りよがりの低徊趣味」。東京中央電信局の「無意義な曲面の乱用」は「悪の華を賛美する悪魔主義的な傾向をも加味したもの」  
建築を現実より「分離」して、社会を俗悪視し、その泥濁と汚辱とに神経衰弱的に気を腐らし、潔癖的に苦惱、悲哀を痛感して、地上の総ての可能を放棄して、理想化された彼方に建築の尊厳性を夢想するなら、それは神秘的理想主義である。